

¹ ATLAS ピクセル検出機の電荷補正方法の最適化と
² 新型ピクセル検出機量産の品質試験結果管理システムの開発

³ 東京工業大学 理学院物理学系物理学コース 陣内研究室
木下怜士 (20M00395)

⁴ 2021 年 12 月 31 日

¹ Abstract

² abstract

概要

概要

1 目次

2 概要	i
3 第 1 章 序論	1
4 1.1 素粒子標準模型	1
5 1.2 LHC	1
6 1.3 ATLAS 実験	2
7 1.4 HL-LHC アップグレード	3
8 第 2 章 シリコンピクセル検出器	4
9 2.1 半導体検出器の一般論	4
10 2.2 ピクセル検出器	4
11 2.3 現行ピクセル検出器	4
12 2.4 新型ピクセル検出器	4
13 第 3 章 現行ピクセルモジュールの電荷較正	5
14 3.1 チューニング	5
15 3.2 電荷較正	5
16 3.3 電荷較正における問題点	5
17 第 4 章 電荷補正の最適化	6
18 4.1 これまでの補正方法	6
19 4.2 電荷較正の補正	6
20 4.3 データが欠陥した際の補正	6
21 4.4 本章のまとめ	6
22 第 5 章 新型ピクセル検出器の開発	7
23 5.1 新型ピクセル検出器の組み立て工程	7
24 5.2 品質試験	7
25 5.3 量産における試験結果管理	7
26 第 6 章 データベースシステムの概要	8
27 6.1 量産に用いるデータベースの概要	8
28 6.2 本研究における開発項目	8

1	第 7 章	試験結果データ管理システムの開発	9
2	7.1	ピクセル検出器情報の登録	9
3	7.2	試験結果の管理	9
4	7.3	試験結果のアップロード・ダウンロード	9
5	7.4	試験結果の評価	9
6	第 8 章	まとめ	10
7	8.1	まとめ	10
8	8.2	今後の課題	10
9	付録 A	AppendixA	11
10	参考文献		12
11	謝辞		13

¹ 第1章

² 序論

³ フランスとスイスの国境にある欧州原子力研究機構 (CERN) に設置されている大型陽子衝突型加速器
⁴ (LHC) では、現在、素粒子物理学の基礎となっている標準模型の精密測定や標準模型を超える物理現象
⁵ の探索が行われている。ATLAS 実験は HC 上にある 4 つの衝突点の 1 つで行われている実験であり、
⁶ ATLAS 検出器を用いて生成粒子の測定が行われている。LHC では加速器のアップグレード (HL-LHC)
⁷ を予定しており、これに向けて ATLAS 検出器のアップグレードを行う。この章では LHC-ATLAS 実験
⁸ とそのアップグレード計画について説明する。

⁹ 1.1 素粒子標準模型

¹⁰ ganbatte kakima shou !!

¹¹ 1.1.1 標準模型の概要

¹² 1.1.2 標準模型を超えた新物理の探索

¹³ 1.2 LHC

¹⁴ LHC(Large Hadron Collider) は欧州原子核研究機構 (CERN) に建設された、周長がおよそ 27 km の
¹⁵ 陽子・陽子衝突型加速器である。陽子ビームの重心系エネルギーは世界最高のエネルギーである 14 TeV
¹⁶ に到達できるよう設計されている。この世界最高のエネルギーを用いて、標準模型の精密測定やそれを超
¹⁷ える新物理の探索が LHC の主な目的である。

¹⁸ 1.2.1 LHC の基本構造

¹⁹ 図 1.1 に CERN に設置されている加速器・検出器の全体図を示す。陽子を生成し、加速器によって段
²⁰ 階的に加速された最大 7 TeV まで加速された 2 本の陽子ビームが、LHC 周上において衝突する。

²¹ 金属製の円筒に水素ガスを注入し、電場を用いて水素分子を陽子と電子に分離する。LHC のビー
²² ムは、最大 2808 個のバンチと呼ばれる陽子のかたまりから構成され、 1.15×10^{11} 個の陽子が 1 バ
²³ ンチとして加速される。すなわち、LHC において陽子陽子衝突から物理現象の探索をするためには、
²⁴ $2 \text{ beams} \times 2808 \text{ bunches} \times 1.15 \cdot 10^{11} \approx 6 \cdot 10^{14}$ 個の陽子を生成する必要がある。

²⁵ LHC のビームパイプ上には 4 つの衝突点が設けられており、それぞれの衝突点において AT-

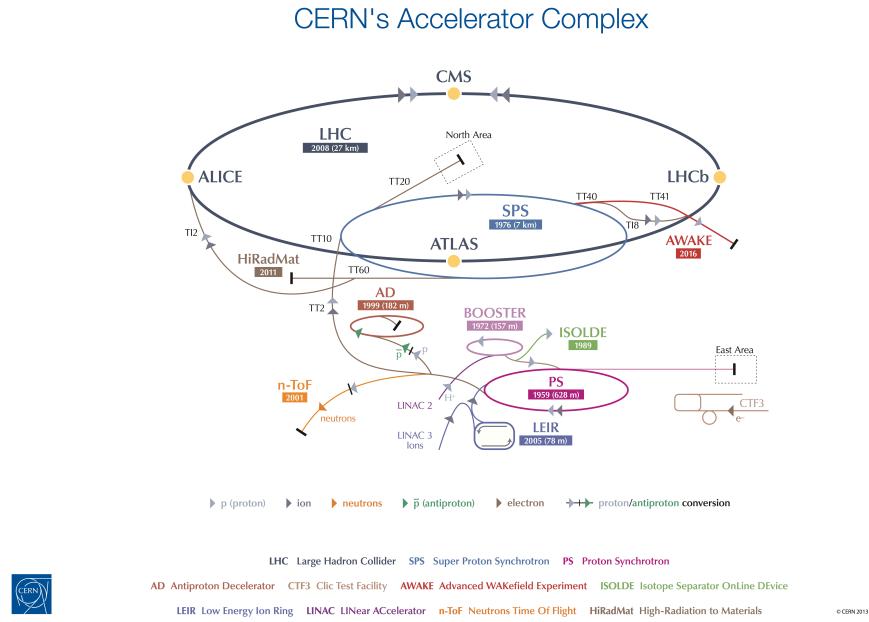


図 1.1 LHC の全体図 [1]

1 LAS(A Troidala LHC Apparatus)、CMS(Compact Muon Solenoid)、ALICE(A Large Ion Collider
2 Experiment)、LHCb 実験が行われている。

3 1.2.2 ルミノシティ

陽子ビームの強度を表すパラメータとして瞬間ルミノシティ \mathcal{L} が用いられる。反応断面積 σ の物理イベントが、1秒あたりに生じるイベント数 N は式 (1.1) で与えられる。

$$\mathcal{L} = \gamma \frac{N_b^2 n_b f_{rev}}{4\pi\epsilon_n\beta^*} R \quad (1.1)$$

4 1.3 ATLAS 実験

5 ATLAS 実験は LHC の衝突点の一つに設置されている汎用型の検出器である。図 1.2 に示すように、
6 ATLAS 検出器は直径 25 m 長さ 44 m の円筒型をした巨大な検出器である。その中心に陽子の衝突点
7 があり、LHC によって加速された陽子ビームが円筒の中心軸を通過するような構造になっている。陽子
8 ビームの衝突点である円筒の中心の内側から順に、内部飛跡検出器、電磁カロリメータ、ハドロンカロリ
9 メータ、ミューオン検出器が衝突点を覆うように存在する。内部飛跡検出器と電磁カロリメータの間には
10 ソレノイド磁石、ハドロンカロリメータの外側にはトロイド磁石が

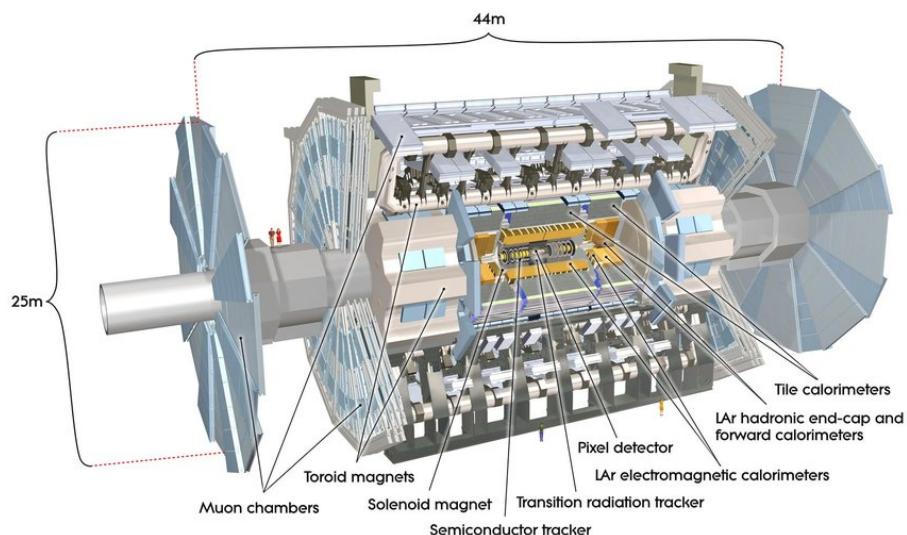


図 1.2 ATLAS 検出器の全体図 [2]

₁ 1.3.1 内部秘蹟検出器

₂ 1.3.2 カロリメータ

₃ 1.3.3 ミューオン検出器

₄ 1.4 HL-LHC アップグレード

¹ 第2章

² シリコンピクセル検出器

³ 2.1 半導体検出器の一般論

⁴ 2.2 ピクセル検出器

⁵ 2.3 現行ピクセル検出器

⁶ 2.4 新型ピクセル検出器

¹ 第3章

² 現行ピクセルモジュールの電荷較正

³ 3.1 チューニング

⁴ 3.2 電荷較正

⁵ 3.3 電荷較正における問題点

¹ 第4章

² 電荷補正の最適化

³ 4.1 これまでの補正方法

⁴ 4.2 電荷較正の補正

⁵ 4.3 データが欠陥した際の補正

⁶ 4.4 本章のまとめ

¹ 第5章

² 新型ピクセル検出器の開発

³ 5.1 新型ピクセル検出器の組み立て工程

⁴ 5.2 品質試験

⁵ 5.3 量産における試験結果管理

¹ 第6章

² データベースシステムの概要

³ 6.1 量産に用いるデータベースの概要

⁴ 6.2 本研究における開発項目

1 第7章

2 試験結果データ管理システムの開発

3 7.1 ピクセル検出器情報の登録

4 7.2 試験結果の管理

5 7.3 試験結果のアップロード・ダウンロード

6 7.4 試験結果の評価

₁ 第8章

₂ まとめ

₃ 8.1 まとめ

₄ 8.2 今後の課題

₁ 付録 A

₂ AppendixA

1 参考文献

- 2 [1] "The CERN accelerator complex" , <https://cds.cern.ch/images/OPEN-PHO-ACCEL-2013-056-1> CERN Document Server
- 3 [2] Joao Pequenao. Computer generated image of the whole ATLAS detector. Mar 2008.

1 謝辞

2 shaji

1 図目次

2 1.1	ATLAS 検出器	2
3 1.2	ATLAS 検出器	3

1 表目次